

チューター活動と留学生相談室の支援 —山梨大学の事例から—

伊 藤 孝 恵

要 旨

留学生の勉学・研究の充実と向上のため、入学1年目ないし2年目の留学生に対し、個々に学生がついてその勉学や生活上の指導・援助を行うチューター制度は、国立大学法人を中心に多くの大学で実施されている制度である。本稿では、その活動の重要性を再認識するとともに、チューターから寄せられる相談より、チューターの抱える問題及び留学生相談室の支援の事例を紹介し、今後のチューター活動とその支援を考える一助としたい。

キーワード：チューター、留学生、留学生相談室、コミュニティ、ネットワーク

1. はじめに

外国人留学生（以下、留学生）の増加に伴い、留学生のための相談室を設けている大学も多く、そこに寄せられる相談から留学生が抱える悩みや問題を知ることができる。2006年4月から12月までに山梨大学の留学生相談室で取り扱った相談内容は、勉学・研究、生活一般、経済問題、対人関係・心理面、進路・就職、医療・健康、国際交流会館・学生寮と、多岐に亘るものであった¹。こうした相談のうち、相談担当教員が単独で対応できるケースもあるが、ビザや奨学金、履修・卒業要件、勉強方法など各部局や指導教員による説明・助言の方が効率的・効果的と思われるものや、医療的に保健センターや医療機関などの専門家の助言・治療が必要だと判断されるものもある。また、問題が複合的な場合は、関係者が連携して問題解決にあたることとなる。

このように、留学生の多様な援助ニーズには、一人の相談担当教員による個別対応だけでは限界があり、教員、職員、学生、地域住民、各分野の専門家といった留学生を取り巻く人々による人的サポートが欠かせない。留学生相談室は、留学生個々の相談に応じるとともに、これらの人々との連携を図り、支援・相談につなげていくコーディネーターとしての役割も求められるといえよう。

加賀美(2007)は、援助方法について、病気になったら治療するという従来の伝統的な「医療モデル」の発想を転換させ、これからは集団や地域の中でともに支え合っているという感覚をもち、自己の力による問題の整理・解決や問題の予防を目指すべきだという「コミュニティ心理学的援助モデル」を提唱している。その具体策として、留学生の友人形成の促進やコミュニティでの居場所作り、交流プログラムの充実、気楽に相談室を利用しやすい雰囲気・環境作り、及び多様な支援ネットワークと援助資源の開発などの大学コミュニティの環境作りがあると加賀美は示唆する。

¹ 詳細については、『言葉の学び、文化の交流』山梨大学留学生センター研究紀要No. 2 pp. 58-64を参照

井上・大橋(2007)は、留学生カウンセラーとしての経験を基に、カウンセラーの多面的・包括的な役割に注目し、コミュニティ・カウンセリングの幅広い活動を取り入れた「マクロ・カウンセリング」という考え方を提示している。この考えに基づくと、留学生相談担当者は、様々な社会的資源と協働し、留学生が大学や地域コミュニティにおいて、より気軽に効果的なサービスを受けられるよう、コミュニティ全体や関係者に働きかけることが求められているといえる。

日本で勉学生活を送る留学生が抱える悩みや適応過程は、その内容や性質が、短期滞在者と長期滞在者として対照的な特徴を見せると言われる。中本(2005)は、その適応と援助の手段について、交換留学生などの数ヶ月から2年程度の短期留学生の場合は、基本的に、文化的アイデンティティに変化が見られず普遍性が高いため、援助手段としてはレクチャーや適応援助プログラムなど「集団」を対象とするものが効果的だと述べている。これに対し、日本語学校等を経て4、5年以上滞在する学部生など長期留学生の場合は、文化的アイデンティティに変化、拡張、統合が起こり、適応には個性が高いため、カウンセリングなど「個人」を対象とする援助が効果的な手段だと示唆している。実際、数ヶ月から1年程度の交換留学生の場合は、日本語関連科目や大学の交流事業等に参加するなど、留学生同士で行動する機会が多い。一方、学部生や大学院生、研究生などは、各学部、学科、専攻コースに散在し、勉学上の専門性が高い上、個々のおかれている環境やニーズが多様なため、基本的には指導教員や同じ専攻の先輩、あるいはチューターによる個別の援助がより効果的であると期待される。そのため留学生相談担当者は、コミュニティ心理学的見地から、留学生の指導・支援において、指導教員や留学生チューター（以下、チューター）とは特に連携を図る必要がある。

そこで本稿では、山梨大学のチューター活動並びに留学生相談室によるチューター活動支援の事例を紹介し、今後のチューター活動のあり方を考える一助としたい。

2. チューター制度

チューター制度とは、入学1年目あるいは2年目の留学生を対象に、その勉学・研究の充実と向上のため、主に大学院生や学部上級生が、個々の留学生につき勉学や大学生活上のサポートをするものである。チューターは原則的に留学生の指導教員の推薦に基づき、留学生の専攻分野に関連のある者から大学が選定することになっており、大学によって多少の違いはあるものの、1時間あたりおおよそ1000円の謝金が支払われる。チューター活動は、大まかに言えば、日本語学習の援助、履修についての助言、授業やゼミにおける勉学支援、大学院受験のための助言、研究・実験の指導などであり、必要に応じて生活面での支援も期待されている(横田・白土 2004)。また、チューターにとっても、貴重な異文化交流の経験や教育的効果が期待できる。

そのためよいチューターがつくことは、留学生にとって大きな支援となるが、反面、チューター活動について留学生とチューターとの間で期待や考え方が一致しない場合には、双方にとってストレスとなったり問題となったりする場合がある。実際、活動やその支援・コーディネート の難しさが報告されている。若生(2007)では、チューターには、担当留学生となかなか

会うことができない、自分が本当に役立っているのか不安だなど、活動に関し不安や悩みがあり、留学生に直に向き合うチューターに対し、留学生センターの指導・支援の充実化を図る必要があることが指摘されている。また、指導教員と留学生、チューターの三者が活動の内容や方法についてよく話し合い、共通認識をもつとともに、なにか問題が生じた際には速やかに連絡を取り相談できるよう、三者及びチューター活動を指導・支援する留学生センターや留学生相談室との間にもよい関係・環境作りも求められている。

3. 山梨大学のチューター活動と留学生相談室の指導・支援

3.1 留学生とチューターの所属

表1は、2007年度前期、山梨大学において、チューターのついた留学生の所属とその数である。また表2は、同時期チューターとなった学生の所属とその数である。

表1 2007年度前期 留学生*の所属

	教育人間科学部	工学部	医学部	計
学部生	2	14	0	16
大学院生(修士)	1	4	0	5
大学院生(博士)	0	6	2	8
研究生	4	9	0	13
交換留学生	8	4	0	12
計	15	37	2	54

*ここでの「留学生」とは、チューターのついている留学生を指す

表2 2007年度前期 チューターの所属

	教育人間科学部	工学部	医学部	計
学部生	7	9	1	17
大学院生(修士)	5	26	0	31
大学院生(博士)	0	3	1	4
計	12	38	2	52

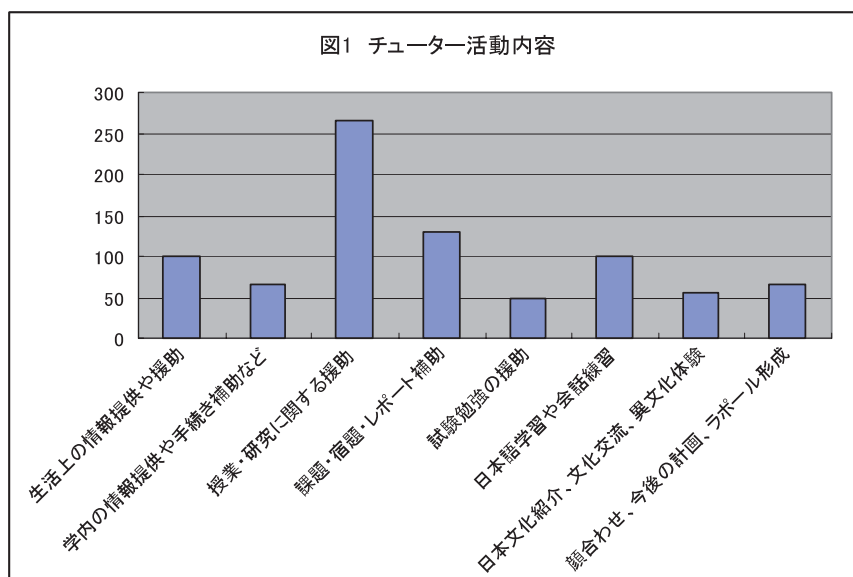
表1、2から分かるように、チューターのついている留学生の約7割は工学部に在籍し、チューターの多くは、工学部の学部上級生や修士課程の院生である。このうち2名のチューターは、それぞれ2名の留学生のチューターを受け持っている。なお、留学生の出身国は、中国が24名と最も多く、以下マレーシア、オーストラリアが各5名、ネパール3名、フランス、ドイツ、アメリカ、韓国、インドネシアが各2名、他ベトナム、タイ、パキスタン、ウクライナ、バングラディシュが各1名であった。このような傾向は、多少の変動はあるものの2006年度もほぼ同様であった。

3.2 チューター活動の内容

図1は、2007年度前期にチューター活動として報告された内容を整理したものである。これを見ると、「授業・研究に関する援助」が最も多く、次いで「課題・宿題・レポート補助」、「日本語学習や会話練習」、「生活上の情報提供や援助」が続き、チューター活動が、普段の授業や課題等のサポートを中心に、生活上の支援などで占められていることが分かる。具体的な内容としては、「授業・研究に関する援助」は、授業の復習、実験の補助、文献検索、ゼミ資料の読み込みなどであり、「日本語学習や会話練習」は、日本語授業の復習の他、日本語での会話や言葉の説明が含まれている。

また、「生活上の情報提供や援助」では、留学生の生活が落ち着いていない4、5月に、市役所や郵便局での手続きや日用品の買い出しの手伝いなどが多かった他、6月にも車の修理や子どもの病院への付き添いなどの援助行動が多く報告された。学期初めのオリエンテーションで配布されるチューターマニュアルには、「留学生の学習・研究効果の向上」に連なることのすべてが指導・援助の内容になるとして、専門分野のほか日本語学習や、カルチャーショックを和らげる心理的援助をも含めた日常生活上のサポートもチューター活動の範疇にあるとしている。留学生にとって、生活面に問題があったり、家族が病気になったりすれば勉学・研究どころではないであろうから、学外においても生活上のサポートがあることは望ましい。しかしそうするとチューターの援助・支援の対象や範囲には際限がなく、チューターの負担が増すとともに、「留学生の学習・研究効果の向上」という本来の目的から活動がかけ離れてしまう恐れが生じる。今後はチューターマニュアルを見直し、チューター活動の明確化とガイダンスでの周知を図るとともに、留学生に対する地域住民の理解と協力を求める必要性を感じる。

3.3 チューターが抱える問題と留学生相談室の支援・指導



*縦軸は時間に関係なく、活動報告に挙げられた項目数を表す。

山梨大学では、留学生センターの業務の一環として、留学生相談室がチューター活動の指導・支援の役割を担っている。学期の初めにはチューターオリエンテーションを開き、活動の趣旨や注意・連絡事項を伝えるほか、学期半ばのチューター交流会では、チューター同士の情報交換を行い、個々の活動内容の見直しと改善を促している。さらに、チューターには毎月活動を報告してもらい、留学生相談室はその一件一件に対しコメントを返すなど、留学生相談室はチューターの指導・育成と活動の充実化を図っている。

毎月の活動報告の主な項目は、活動内容と留学生の様子だが、活動において困ったことや悩みがある場合は留学生相談室に相談するよう毎回チューターに伝えており、問題の予防と問題を最小限に止める工夫をしている。ここでは、2006年度及び2007年度にチューターから留学生相談室に寄せられた相談内容を整理した上、いくつかの事例を紹介する。

何をしたらいいかわからない

事例1

本人が日本に慣れており、また、日本語も他の留学生に比べ堪能でレポート作成なども困っていないようでして何をすべきなのかわかりません。他のチューターの方はどのような活動を行っているのでしょうか。(大学院生)

事例2

今日も会ったのですが、少し話をする程度であまり何を話していいかわからないのが現状です。(大学院生)

事例3

授業の復習など勉強面のことばかりになりがちなので、何か違ったこともした方が良くはないかと思うのですが、どうしたらいいかわかりません。(学部生)

事例1、2、3にあるように、留学生を前にどのような援助活動をすればいいのか、留学生相談室に助言を求める相談が最も多かった。学期初めのチューターガイダンスやマニュアルはあくまで活動の基盤や原則であり、個々の留学生のニーズを把握し、実際にそれに合わせた援助活動をしていくのには難しいこともあるだろう。留学生相談室は、こうしたチューターに対し活動をできるだけ早く軌道に乗せるため、留学生本人と活動内容をよく話し合うこと、指導教員がチューターに何を期待しているのか意向を伺うことを示唆するとともに、チューターの役割と意義を改めて伝えた。

その後、上記3名の翌月の活動報告からは、活動について改善が見られ、留学生相談室の介入に効果があったことが窺い知れる。

事例1'

授業の件なのですが、先生から伺った話によりますと、Aさんは会話はかなりできるようなのですが、文章を書くのが苦手なようでして、他の教官の方から指摘されたようです。私も何度か本人に聞いてみた

のですが、やはり「大丈夫」と言われてしまいます。そこで先生の方から、Aさんに「チューターに文章の書き方を見てもらっては？」と伝えていただきました。私の方からも、ノートを見せてもらえるような機会を作れるようにしたいと思います。

事例2'

留学生と話し毎週やるのはきついということなので隔週やるということにして、その他問題があったときは随時という形にしました。活動内容としては日常の話やレポートやテスト勉強の手伝い、入門ゼミの課題の説明補助などです。

事例3'

主に授業の復習と中間試験対策で、お昼ご飯と一緒に食べながら生活相談も行いました。

留学生と会えない、自分は必要ないようだ

事例4

B君は大学生活に大分慣れたようで、いつも友人と一緒にいるところを見かけます。チューターとして必要な事はないため、しばらく様子を見て、何か困った事があったら接触しようと思います。

(大学院生)

事例5

予定をあわせても土壇場でキャンセルや忘れていてきてくれなかったというようなことが度々ありました。(大学院生)

事例6

Cさん自身もう二十歳をこえていてとても自立していますし、クラスの仲のいい友達と楽しく過ごしているようなので過干渉にならないようにしています。(大学院生)

事例7

今月は連絡はしたのですが、あまり必要ないといわれたのであつてはいません。(大学院生)

次いで多かったのが、留学生と会えない、チューターとしての必要性を感じないという相談であった。中には、学期当初しばらくの間、相手の連絡先も分からないという者もいた。そこで、連絡先が分からなかったり、なかなか担当留学生と会えなかったりするケースにおいて、留学生相談室が留学生と連絡を取り合ったり、直接会って事情を尋ねたりと、チューターと留学生との間で円滑な連絡・交流ができるよう介入した。

またチューターにとっても、論文の追い込みや就職活動などで忙しく、留学生の援助にまで時間的にも精神的にも余裕がなかったケースもあった。

事例8

ここのところ僕のほうが最後の追い上げで忙しく、あまり話せていません。(大学院生)

事例9

メールを1度して、会いましょうとは言ったものの会っていません。自分の就職活動のことなどで頭がいっぱいになってしまっていて、チューターの仕事はかなりおろそかになってしまい、D君やみなさんにご迷惑をおかけしてしまっていると思います。申し訳ありません。(学部生)

チューター自身が自分の研究や就職活動等で忙しく、十分にチューター活動が行えないことをすまなく思っている場合がある。このような場合は、留学生に事情を説明して理解を求めるよう指示するとともに、チューター活動に対し多大な責任を感じすぎないよう、相手に対してだけでなく自分に対しても無理せず行うよう伝えた。

事例4から9のようなケースにおいて、留学生相談室が留学生とチューターとの間に介入し具体策を講じて、活動に改善が見られない場合もあった。これには、留学生にチューターによる援助ニーズがなかったことや、十分活動が行えない学生がチューターとなってしまったことなど、チューターの選定に問題があったことが、理由として考えられる。

日本語の教え方が分からない

事例10

現時点で、日本語についての学習のサポートを行っていますが、日本人である私でさえ正解についての正確な解説が行えない問題があります。＜中略＞通常の生活の範囲であれば、口語表現としてフィーリングで教えているのですが、今回の場合、日本語能力試験ということで、やはり正解たる理由を正確に教えるべきなのでしょうか。この件と関連してですが、もし日本語学習における参考資料でよいものがありましたら、教えていただけると幸いです。(大学院生)

事例11

ある程度E君は日本語がしゃべれるので、それが逆に「日本語について何を教えればいいんだろう？」と考えてしまいます。やっぱりコミュニケーションの中で覚えてもらうのがいいのでしょうか？その辺がよくわかりません。(学部生)

日本語の学習補助について、何をどのように教えたらいいのか、説明や解説をどこまでどう行ったらよいかなど、その指導・援助の方法や内容等に関する相談も複数寄せられた。こうした相談に対し留学生相談室は、問題となった事例に対する直接の回答のほか、チューターに教え方の指導や教材の紹介等を行い、今後もチューターが日本語の学習補助を行ってゆけるよう指導的援助を行った。

この他にも、留学生が学期の途中で進路変更した結果、チューターの存在意義が分からなくなってしまったという悩みや、レポートやレジュメの日本語添削、毎週の課題補助などでチューターの負担過多であると訴える相談も寄せられた。このようなチューター本人への助言・支援のみでは不十分だと思われるケースについては、留学生相談室が留学生や指導教員と連絡を取り話し合うなどして介入し、関係者と連携して解決につなげた。これにより、チューターが問題を一人で抱え込むのを防ぐと同時に、速やかな問題解決につなげることができたと思われる。

4. まとめ

大学コミュニティにおいて身近にあって留学生に助言・援助できる一人として、チューターとその活動には期待が大きく、多くのチューターが、少しでも留学生の力になりたいとその活動に真面目に取り組んでいる。中には、留学生とチューターの関係が「教え・教えられる関係」から、「共に教え・学び合う関係」へと発展し、よき友人・理解者となるケースや、チューター活動期間が過ぎた後も留学生が元チューターに相談するケースなど、チューター制度の枠を越えて、留学生・チューター双方にとって有益な経験となったり、友好関係を築いた事例も珍しくない。

事例12

特に私が「教える」というわけではなく、お互い意見を出し合い、協力して、活動することができました。プログラミングの講義では、私がプログラムが苦手なので、逆に教えてもらいました。(大学院生)

事例13

初めの頃に積極的にこちらから話しかけた事で、信頼は得られたと思います。今では友達も増えて、悩み事などの相談を受ける事も減りましたが、いつでも話ができるような関係になれて良かったと思います。もともと異文化に興味があったので素晴らしい経験ができました。また、日本の文化や言葉などもっと説明できるようになりたいと思いました。(大学院生)

事例14

話をするととても楽しく、こちらも勉強になる事がたくさんあります。このような異文化交流ができる事を、とても幸せに感じています。(大学院生)

ただし、上述したように、全てのチューターが常に充実した活動を行っているわけではない。チューターと留学生の間で十分な意思疎通と共通認識が持たれ、信頼関係の上に立った援助活動でなければ、留学生のニーズに合った効果的な援助活動は難しく、チューターにとっても活動からの学びや喜びは薄いものになってしまう。

中島(2005)は、留学生を支援する者が自ら解決できる範囲には限界があるため、大学内外の人の知恵・助言を得て、連携しながら解決できるようなネットワーク構築の必要性を提唱しているが、これは学生チューターの場合にも同様に言えることだと思われる。担当留学生の勉強・生活上の問題の全てを、チューター一人が負担し孤立しないよう、チューターは指導教員とよく連絡を取り、場合によっては留学生相談室が介入し、関係教職員や専門家との連携を図り、チューター活動を大学コミュニティの人的ネットワークによって指導・支援していくことが重要である。

母国を離れた留学生が大学や地域コミュニティにおいて孤立しないためには、まず留学生を温かく支える人材の確保が重要である。それとともに、留学生は、誰に対しても同質の支援・援助を求めているのではなく、留学生を取り巻く指導・支援・援助者に対し期待される資質や

能力については役割分担があるといえる。潘(2007)では、留学生指導・相談担当の職員には、事務管理能力や法律規則に対する知識、留学生への連絡事項や情報提供などの経験が求められているのに対し、教員には研究能力の他、留学生教育に関する知識やカウンセリング能力などが期待されていることが明らかにされている。そして留学生相談室は、留学生からの相談や問題への対応はもとより、普段身近に留学生と接するチューターへの指導・支援を通じて、チューターにその存在意義や役割の自覚を促し、留学生がチューターとともに自立した大学生活を送れるよう、問題の予防と最小化を目指すコーディネーターとしての役割をも担っているといえよう。

チューター活動は、その期待の大きさと裏腹に、全てのチューターに効果的に活動してもらうことの難しさをも孕んでいる。学内外関係者への留学生やチューター活動に対する認識・理解の向上や、チューター活動の明確化、チューターの選定方法など、チューター活動への指導・支援のあり方には今後も改善を図る課題が多々ある。また、留学生個々にチューターがあたるのではなく、所定の時間・所定の場所にチューターが待機し、そこを訪れる留学生に対応するようなチューター活動も、滋賀大学などで見られる。今後は、留学生のチューターに制度に対するニーズを調べるなど、チューター制度のあり方をも見直し、留学生支援の一層の充実化を図りたいと思う。

参考文献

- 井上孝代・大橋敏子(2007)「外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入 JAFSA多文化間メンタルヘルス研究会の活動から」『留学交流』第19巻 第10号 6-9
- 加賀美常美代(2007)「留学生のメンタルヘルスと包括的支援体制」『留学交流』第19巻 第10号 2-5
- 河野理恵(2007)「一橋大学におけるチューター活動状況 —2004年～2006年の3年間の分析—」『一橋大学留学生センター紀要』第10号 49-59
- 寅野滋(2007)「チューター制度の改革」『滋賀大学国際センター報告書 2006』71-74
- 中島 清(2005)「福井大学における相談業務—ネットワーク構築による対応」『留学交流』第17巻 第10号 6-9
- 中本進一(2005)「埼玉大学の留学生支援としての相談体制の在り方と課題」『留学交流』第17巻 第10号 14-17
- 潘建秀(2007)「留学生が留学生指導・相談担当者に期待する資質・能力に関する研究—教員と職員との差異に注目して—」『留学生教育』第12号 留学生教育学会 85-93
- 水野治久(2005)「留学生に対する心のケアの意義と重要性—援助サービスの具体的方法」『留学交流』第17巻 第10号 2-5
- 横田雅弘・白土悟(2004)『留学生アドバイザーズ』165-168
- 若生正和(2007)「チューターへのアンケート 結果および分析」『大阪教育大学 留学生センター年報 留学生教育』第13号 41-49